
山手線サバイバー-Yamanote Line Survivor-

りす君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山手線サバイバー - Yamanote Line Survivor -

【Nコード】

N6565B

【作者名】

りす君

【あらすじ】

山手線サバイバルゲーム…それは、裏の世界で仕組まれた死のゲーム。キミは、周りの知らない人達と一緒に協力し、生き残る事が出来るか？

プロローグ（前書き）

久々のホラー連載ですが、頑張って書いていこうと思います。
では、お読み下さい。

ブローグ

やまのてせん
山手線：それは、東京都の都心部を走る環状線である。電車関係に
うと
疎い人でも、名前だけは聞いた事があるだろう。

この山手線、車体がイエローグリーンで駅数は29ある。

その中の停車駅でも、東京（とうきょう・Tokyo）・新橋（し
んばし・Shin>mbasi）・品川（しながわ・Shina
gawa）・渋谷（しぶや・Shibuya）・原宿（はらじゅく
・Harajuku）・新宿（しんじゅく・Shinjuku）・
池袋（いけぶくろ・Ikebukuro）・上野（うえの・Uen
o）・秋葉原（あきはばら・Akihabara）等は、山手線駅
名で特に有名な所だろう。

さて、これからこの物語の核心に移ろう。

これは、山手線を利用したサバイバルゲーム。決してお遊びでは無
く、れっきとしたゲーム。このゲームは、国家や警察は絶対に止め
られない。

このゲームに必要なのは、自分以外の周りの知らない人間達との団
結力。つまり、このゲームにはチームで戦う事になる。チームメン
バーは自分自身と自分が乗っている車両にいる人々。相手は、その
他の車両に乗車している人々、全員。その人達を蹴落とさなければ、
自分を含めその車両全員助からない。

そしてもう一つ必要なのは、各々（おのおの）の高い知能。何故な
ら、これはクイズをしながら進むゲームなのだから。

以下、“山手線サバイバルゲーム”のルールである。

・1駅停車する事にクイズが出題されます。ジャンルは決まっていません。つまり、何にでも答えられる柔らかい頭が必要とされます。

・回答方法は、答えが解った方から1車両ごとに備えつけてある非常車両電話を使ってお答え下さい。

・3問正解しますと、ゲームクリアーです。クリアした車両に乗車した者をこのゲームから解放します。

その時、1車両をゲームオーバーにする事が出来ます。クリアした車両に指名された車両は、その場でゲームオーバー、全員その場で暗殺部隊により殺害されます。

・又それとは逆に、3問不正解になりますと、その車両のチームはそこでゲームオーバーとなり、全員殺害されます。

・そして、最後まで残った車両のチーム全員に、このゲームの賞金として、一人1億円ずつ贈呈そうていされます。なので、3問正解したとしても車両から出ずに次の駅のクイズからまた参加し、最後まで生き残れば、その車両のチームは賞金を獲得する事が出来ます。

・ちなみにゲームに参加してもらう車両は、ランダムです。無差別に選んだ車両1本がゲームへ“強制的に”参加させられます。参加者に、拒否権は一切ございません。

・ゲームに参加してる最中、逃げる事は許されません。逃げた瞬間、暗殺部隊によりあなたはこの世から抹消されます。

・警察に通報しても無駄です。通報したとしても、警察は動きませ

ん。又、警察に通報した瞬間、その車両はその場でゲームオーバー。警察に通報した者を含め、通報した者と一緒の車両に乗車していた者全員、その場で暗殺部隊により、殺害されます。

・ゲームにクリアした皆様は、このゲームの概要を第三者には決して話してはなりません。話した瞬間、皆様は殺されます。

以上、山手線サバイバルゲームの説明及び、プロローグを終了とする。

作者

S u r v i v a l 1 : 東京 & I t ; T o k y o & g t ; - 無知 - (前書き)

この物語の主人公である雪原は、単なる商社マン。

彼は、商談をするために田尻コーポレーションに足を運んだ所から始まる…。

S u r v i v a l 1 : 東京< ; T o k y o & g t ; - 無知 -

(某企業・地下4階会議室)

「 外部の者から聴かれて無いだろうな? 」

「 ハッ、盗聴されておりません! 」

「 宜しい。では、 “ 例の企画 ” について会議を始める。 」

「 …… 暑い。しかし、夏の外回りはキツイな。 」

俺は、ズボンのポケットからハンカチを取り出して汗を拭^{ぬぐ}った。

今は、7月の上旬。日射しが強く、朝からとても蒸し暑い。そんな時に、部長から外回りを頼まれるとは、運が悪すぎる。

街には、日傘をさしながら歩く貴婦人が多い。他には、喫茶店に入って仕事をサボって涼んでいるサラリーマンやキャリアウーマンが見られる。まあ…昼間の東京はそんなモンだ。

さて、前方に見えたのは俺の会社の取引先である“田尻コーポレーション”だ。日本で5本の指に入る大企業だ。やっとの事で提携の時点まで持ち込めたのだ。

俺は自動ドアを抜け、受付嬢に

「私は、春日^{かすが}コーポレーションの雪原^{ゆきはら}と申します。取締役の東雲^{しののめ}さんを願ひします。」

と、言った。

「かしこまりました。少々お待ち下さい。」

受付嬢が内線で呼び出してから数分後、エレベーターから一人の男が降りてきた。

「あ、どうも…お忙しい所をすみません。」

「いえいえ、こちらこそ御世話になっております。」

挨拶をし、お互いに名刺交換を交した。

(田尻コーポレーション代表取締役 東雲 作雄 - しののめ さくお -)

「これはどうも…ええと…雪原…」

「要真^{ようま}です。珍しい名前だとよく言われます。」

「ハハッ。で、今回のそちらの用件は？」

（ふう…無事に取引を終わらせた。これで部長に怒られずに済むなあ。）

俺は、田尻コーポレーションを後にして東京駅に向かっていた。

「さあて、会社に戻って夕食を食ってから残業するか。」

こんな呑気な考えが出来たのは今の内だった…。

この後…俺自身、今まで聴いた事が無い最も残酷なゲームに参加する事になるとは…。

S u r v i v a l 2 : 東京 & l t ; T o k y o & g t ; - 異変 - (前書き)

雪原は、東京駅に着いた。

切符を購入し、改札を通り過ぎて彼が乗ろうとしている山手線の水
戸へ続く階段の前で、彼の足は止まった…。

平日の夕刻の東京駅は、会社から帰路に就く人達や、今まで遊んでいた若者達などの帰宅ラッシュで混雑している。
今日も、沢山の人達が東京駅構内を歩いている。

「ふう…疲れたな。さて、切符買わないと…」

俺が券売機で切符を購入しようとしたその時、俺の耳に駅員のアナウンスが聴こえた。

「ええ…JR東京駅をご利用頂きまして誠にありがとうございます。
只今より、山手線外回りホームにおきまして…」

（山手線外回りって…俺、それに乗んじやん。事故でも起きたのか？ま、切符買っちゃったし…さっさと行くか。）

俺は、鞆からイヤホンとラジオを取り出し、イヤホンを耳に^は填めてラジオを聞きながら改札を通して山手線ホームへ向かった。

この数分後…アナウンスを最後まで聴けば良かったと、俺は後悔する事となる。

山手線のホームへ続く階段の前まで来た時、俺は足を止めた。

階段の入口には、沢山の人ばかりが出来ていた。誰かが来るわけもなく、そこにいた人々の目は上のホームに向けられていた。どうやら、上で何かがあったらしい…。

（あれ？誰も、山手線を利用しないのか？いや、そんな事はある筈がない。てか、俺の周りにいる人達はホームの様子を見てる感じがする。…やはり、事故でも起きたのか？）

俺は、少し心配になり、近くにいる駅員に問いかけた。

「あの…山手線、事故とかで止まってるんですか？」

すると、駅員は顔色一つ変えずにさらりと言った。

「いえ、通常通り運行してますけど？」

（運行してるなら、何故誰も乗ろうとしてないんだ？）

俺は、更に気になってまた駅員に質問した。

「今日は何か…山手線でイベントでもあるんですか？」

すると、駅員の眉が少し動いた。そして駅員は、山手線ホームへ続く階段の方を見ながら言った。

「ええ、とても楽しいイベントがこれから行われようと…いや…まあ、詳細の程はお客様が上に上がってみて、ご自分の目でお確かめ下さい。では、失礼します…。」

そう言っただけで駅員は、大勢の傍観人の間を通り抜けて行ってしまった。

（何なんだよ…楽しいイベントって？こっちは、早く会社に戻りたいのに…）

俺は駅員が言つた事を気にせず、下のコンコースから上のホームの様子を見ている大勢の傍観人を避けながら、ホームへ続く階段を駆け上がって行つた…。

S u r v i v a l 3 : 東京 & I t : T o k y o & g t ; - 山手線 サバイバルゲー

雪原は、ホームへ到着した途端、目の前の光景にただ呆然と立ち尽くしていた…。

階段を駆け上がり、ホームに辿り着いた俺は、目の前の光景に呆然と立ち尽くしていた。

「な…何なんだこれは…」

俺の目に映ったのは、“山手線サバイバルゲーム”と車両全体に装飾された1本の山手線と沢山のランプが装飾された眩しい大きな看板。それにメタリックレッドの特殊なえんぴ服と同じ色のスーツ、白のハットを着用して、片手にマイクを持っているとても怪しい中年男が1人。その男の周りには、全身黒のスーツを着用した体格の良い男達がズラリと並び立っていた。

その時、俺の真上にあつたくす玉から沢山の紙屑かみくずと共に白い紙が落ちてきた。しかも、その瞬間にあの怪しい中年男が俺に近寄ってきたのだ。男は、俺の顔を見るなりニヤリと笑い、こう言った。

「おめでとうございます！あなたは、最後の参加者となります！いやー、あなた運が良い！こんな楽しいゲームに参加できるとは！ささっ、この車両に乗車して下さい！」

男は無理矢理、俺を車両に乗車させようとした。当然、俺は待ったを掛けた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！何だいきなり…何なんだこの訳の解らないこのイベントは！」

すると、男は自分の懐ふちから水色の表紙の冊子を取り出した。表紙には大きな字で、

（あなたは、周りの知らない人達と協力し、最後まで生き残れるか？！山手線サバイバルゲーム）と書かれてあった。

「あなたは今から、この楽しいゲームに参加して貰います。さあ、乗って下さいな！」

男はそう言っで、また俺を車両の中に押し詰めようとした。俺は、その理不尽さに到頭キレた。

「おい！ふざけんな！こんな下らないゲームに参加してる程、俺は暇じゃない！」

俺は男を振り払い、階段を降りようとした。が、次の瞬間…首に冷たい感触と共にカチツと音が聴こえ、俺の足は自然に止まった…。

S u r v i v a l 4 : 東京 & l t ; T o k y o & g t ; - 出発進行 (ゲームスタ

雪原は、首に銃口を向けられて動けなかった…。

「…一体、何のつもりだ？」

今、俺の首へ大柄の男が銃口を向けている。

「困りますねえ。あなたはもう、このゲームの参加者なんですよ。次、抵抗しようとしたら…あなたはああいう風になりますよ。」

中年男が指差した方を見ると、向こう側で大柄の男数人と、OLらしき女性が争っている。

「止めて！！私、こんなゲームになんて参加したくない！放して！」

必死に叫び、逃げ出そうとする女性。すると、一人の男が懷から黒い塊を取り出した。女性が、それを怖がって悲鳴を上げた瞬間だった…。

（ドンッ！）

一発の銃声と共に、女性は頭から血しぶきを上げ、ゆっくりと膝から崩れ落ちた。

「くっ！！」

女性は、全く動かず本当に死んでしまった…。
男達数人は、その女性の遺体を運んでいった…。

「御解り頂けましたでしょうか？」

男は、ニヤリと笑った。

「……………」

「それじゃあ、乗車して下さい。」

（今は、この男達に従うしかない…。）

俺は、ゆっくりとドアから中へ入って行った…。

「これで全員揃いましたぁ！！」

中年男は、運転手に向かって叫んだ。駅員は、発車メロディを鳴らした。

「それでは…山手線サバイバルゲーム、スタート！！」

男の一声と共に、ドアが閉まった。

列車は、動き出し徐々にスピードを上げて東京駅のホームを離れていった。

（これからどうすれば良いんだ…）

俺が窓の外を眺めながら考えていると、後ろから声が聴こえた。

「皆様、こちらを向いて下さい。」

俺が声が聴こえた方を向くと、そこには黒服を着た一人の大柄な男と大きなモニターがあった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6565b/>

山手線サバイバー-Yamanote Line Survivor-

2010年10月17日03時19分発行